Vol.19-3 2012.3.9

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

CONTENTS

スポット 2 ミュージアムの収蔵品 52
慰問袋

巻頭つれづれ 3 月と舟と肉―心に期すこと
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎 育郎〔立命館大学名誉教授〕

館長だより 5 国際平和ミュージアム20周年の年にあたって
立命館大学国際平和ミュージアム館長
高杉 巴彦

ここが見どころ 7 歴史と責任
立命館大学国際平和ミュージアム副館長
加國 尚志〔立命館大学文学部教授〕

運営委員リレー連載 8 資源・環境をめぐる争奪戦―武器なき戦争―
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
小幡 範雄〔立命館大学政策科学部教授〕

ミュージアムおすすめの一冊 10 松井やより 著
『女たちがつくるアジア』（岩波新書　1996年刊）
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
遠山 千佳〔立命館大学法学部准教授〕

ミニ企画展 11 開催報告（2011年10月～2012年1月）

事業報告 12
- 特別展 世界報道写真展2011
- 2011年度 秋季特別展 プリーモ・レーヴィ―アウシュヴィッツを考えぬいた作家―
- 文字・活字文化の日「平和って　なに色?」
- 第58回不戦のつどい／わだつみ不戦の誓い展
- 2011年 長崎青少年ピースボランティアとの平和交流事業
- アルセニエフ総合博物館との学術協定の調印式・記念講演

18
- 第18回日本平和博物館会議に参加して
- 2010年度 資料・図書など寄贈者一覧
- 第5回 立命館附属校平和教育実践展示
- 日本平和博物館会議加盟館の紹介・第3回 長崎原爆資料館
- ボランティアガイド活動日誌
  立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド・平和友の会 川畑 康郎
- 2011年度入館者状況（2011年4月～2012年1月）、編集後記
- ミュージアムインフォメーション

日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

立命館大学
国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

慰問袋

表に陸軍と海軍の軍旗と、「祈武運長久　慰問袋」の文字があり、差出人の住所と氏名を書く欄があります。マチのない平らな袋です。

慰問袋とは、従軍中の兵士に対するちょっとした贈り物を入れた袋のことで、中身も含めて慰問袋と呼ばれていました。家族や親類、友人などへ送ることもありましたが、軍に寄贈し軍が兵士へ配布する仕組みがありました。日中戦争が本格化し従軍する兵士の数が増えると地域や職場、学校に対して慰問袋を送るよう盛んに呼びかけが行われ、割り当てもありました。慰問袋作りを呼び掛ける映画や歌も登場し、雑誌にも慰問袋の記事が載りました。

送り手がさらしなどを縫い、袋を作ることも多かったようですが、この資料のような既製品も多数ありました。売り上げ向上を狙い、買い物をするとこうした袋を進呈するといった販売促進もありました。

当時を知る人々の証言や記録によれば、慰問袋の中に入れたものは「日用品」です。具体的な決まりはなく、実に様々なものを詰めたようですが、大雑把なカテゴリーで捉えることができます。

慰問袋
縦：34cm　横：19.7cm

1．おかし（キャラメル、金平糖など）
2．嗜好品（タバコ、お茶など）
3．調味料、珍味など（鰹節、するめ、佃煮、缶詰など）
　こうした食べ物は、国内とは異なる侵略地や兵舎での食生活に彩や楽しみを添えるものでした。
4．玩具（将棋やゲーム、ブロマイドなど）
5．読み物（雑誌や本など）
　余暇の時間を充実させるものです。
6．衛生関連品（かみそり、石鹸、歯ブラシなど）
7．医薬品（胃薬、傷薬、虫さされの薬など）
　現実的な需要に対応したものですが、当時の新聞や雑誌広告ではこうしたものが慰問品に最適と盛んに宣伝されています。
8．衣服（肌着や靴下など）
9．天候対応品（寒冷地へ懐炉や手袋、南方へ蚊よけなど）
10．文具や道具（便箋、はさみなど）
　これらもまた必需品ですが、北方の部隊には手袋を、南方の部隊には虫除けなどを送ることもあったようです。
11．郷土の風情を伝えるもの（葉書や雑誌、郷土の様子を伝えるもの）
　5や10とも重なりますが、故郷を離れている人々には郷土の風情が懐かしく、安心感を与えて任務に奮闘させる目的もありました。
12．真心をこめた品（小さな人形など手作りの品）
　民芸品や手作りの小物などです。
13．愛国心の鼓舞や戦勝を祈願するもの（千人針や戦勝祈願のお守りなど）
　慰問袋の本分である、千人針を作って入れたという証言は多数あります。
14．慰問文
　当時の生活の中に浸透しており、書き方の手引きも多数販売されていました。学校でもしばしば子ども達に慰問文を書かせていました。

軍へ寄贈された慰問袋がどれほど、一人ひとりの兵士の役に立ったり慰めになったのか、また、一五年戦争の期間中にどれほどの数の慰問袋が贈られ、そのうちどれだけが実際に兵士の手元に届いたのかはわかりませんが、受け取った兵士は大変喜び、後にお礼に訪れたというエピソードはよく耳にします。動員される兵士の数が増え身近な人々が戦地に送られれば、戦争を支持するしないに関わりなく、彼ら兵士に何か届けたい気持ちを持つ人は増えていきます。慰問袋にはこうした銃後の人々の心情を、戦争や軍を支える行動に具体化させる機能もありました。

この慰問袋は４月から教材として貸出可能になります。（全複製品）

（学芸員　兼清順子）

月と舟と肉―心に期すこと

立命館大学国際平和ミュージアム
名誉館長　安斎育郎
（立命館大学名誉教授）

明治が終わって100年目

2012年は、明治時代が終わって100年目です。明治時代が始まって100年目の頃、「明治は遠くなりにけり」という言葉が流行したことがありましたが、もともとは中村草田男が1931（昭和6）年の大雪の日に、東京港区の母校（青南小学校）を訪れて詠んだ「降る雪や明治は遠くなりにけり」から来ています。距離的・時間的な遠近感覚は、人により、状況により、かなり違うのでしょうね。草田男の場合は、降りしきる雪の中で時間と空間の感覚がそれこそ真っ白になり、今がそのまま明治であるような、はたまた、明治はもう消え去ってしまったような感覚に襲われたとか。

「明治」という元号は、『易経』の「聖人南面而聴天下、嚮明而治」に由来します。「学識・人徳豊かな人が君主となって人々の声に耳を傾ければ、世は明るい方向に治まる」という意味ですが、さて、明治は「明るい時代」だったのか？特権階級には「明るい時代」だったが、『女工哀史』に代表される大多数の底辺の人々には「暗い時代」だったのではないか、富国強兵による近代化の道を歩む大日本帝国のもとで、アジア近隣諸国の人々にとっても「暗い時代」だったのではないかという指摘は重く、「司馬遼太郎史観」を下敷きにしたテレビ・ドラマ『坂の上の雲』の評価をめぐっても大論争がありますね。

元日散策の発見その1：服と朕

明治の「明」の字は「冏（＝窓）＋月」の会意文字で、「月」は文字通り「お月さま」です。まさに「月明かり」ですね。

大晦日に東京からわが家に客人があり、2012年の元旦早々、京都市内を案内する機会がありました。そこで写真のような奇妙な看板を見つけました。3文字目は明らかに「服」でしょうが、どういう訳か「月」が欠けています。新月か、皆既月食か。

「服」は「舟＋及」から成る会意・形声文字で、この場合の「月」は「お月さま」ではなく「舟」です。「及」は「人にピタリと手を添えた様」を描いた文字で、「服」はもともと「舟の縁（ふち）にピタリと付ける板」を意味しましたが、やがてそれが「人の体にピタリとつける衣」の意味にも使われました。ちょっと意外ですね。「服」は「他人の意向にピタッと寄り添う」意味で「服従」のようにも使われます。

「月」が「舟」を意味するのは、天皇が自分自身を指すときに使った「朕」の場合も同じです。「舟＋両手で持ち上げる姿」から成り、「浮力」が原義のようですね。それを中国の秦の始皇帝が、人民によって持ち上げられた姿をイメージしたのか、自分を意味するときに「朕」という文字を用いたということです。明治天皇の教育勅語「朕思うにわが皇祖皇宗の…」や、昭和天皇の終戦の詔勅「朕深く世界の大勢と帝国の現状とに鑑み…」のように、日本でも明治～昭和の時代にはよく使われました。昔は、「朕」の字の「月」を書き忘れたら大目玉でしょうが、それにしてもこの学生服専門店の看板は目立ちました。

元日散策発見その2：膳と育

同じ日の京都ガイドで、写真のような「薬膳」料理屋さんの看板を見つけました。「おやっ？」と感じましたね。「膳」の字がちょっと一部欠損しています。

「膳」は「肉＋善」、「善」は「羊＋言」です。「羊」は「美しい」という字にもあるとおり、「美味で立派なお供え物」、「言」は「はっきり言うこと」ですから、

「膳」は全体として「豊かで美味しい食事」のことです。この場合の「月」は「お月さん」でも「舟」でもなく「肉」なのですね。「薬膳」は「体にも良く、美味しい、見事な料理」のことでしょうが、この看板の字は「一味足りない」印象を与えるので、ちょっと損ですね。

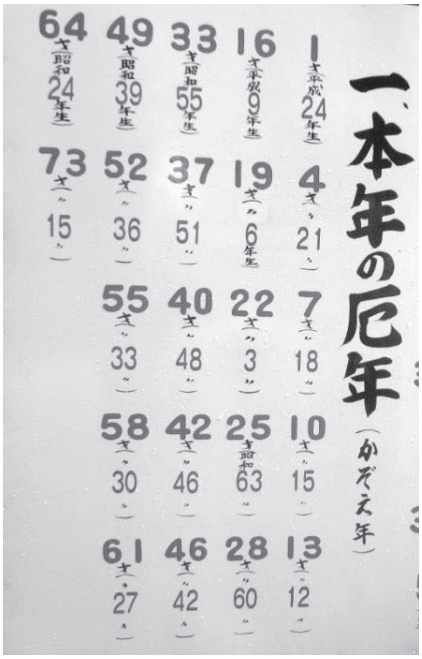
「月」が「肉」を意味するのは、私の名前の「育」の字も同じです。上半分は「子を逆さまにした形」ですから、全体として「頭を下に正常分娩で生まれた子が肉づき良く育つ様」を表しています。私は1940（昭和15）年に9人きょうだいの末子として東京で生まれましたが、前年に第2次大戦が始まり、翌年に太平洋戦争が始まった戦争の時代で、「産めよ増やせ」の時代でした。きょうだいのうち3人は幼い頃に亡くなり、4人が戦争に行き、私とすぐ上の兄は疎開先の福島県で敗戦を迎えました。今は原発事故で福島から東京に「疎開」しているのですね。

元日散策発見その3：お～「厄年」

正月京都案内で下賀茂神社も訪れましたが、昭和15年生まれの私は「数え73歳」の「厄年」であることを発見しました。

しかし、境内に掲げられた「厄年一覧表」を見ると、厄年だらけです。総じて3歳間隔なのが20歳台末から40歳台頭にかけて不規則変化し、また3歳間隔に戻ったかと思いきや、64歳からいきなり73歳に跳ぶのですね。67歳、70歳は「放免された」のか、「見放された」のか。実際は、この厄年一覧表の横に「大厄年一覧表」があって、「男25歳、42歳、61歳、女19歳、33歳、39歳」、しかもその前後は「前厄、後厄」ということなので、1～73歳の間で厄年に当たる人は38％、なんだかんだ2.6人に1人は厄年ということになります。なんとまあ！

「厄年だから気をつけよう」と生活を律する意味があったのでしょうが、あまり大安売りすると緊張感を欠きます。「厄」は「人が崖に出くわして進退窮まった様」を表す文字ですが、その意味では、混迷する日本社会も大厄に相違なく、放射線防護学の専門家である私自身も、福島原発事故の中で「崖に出くわして進退窮まっている」とも感じます。



さあ、やれることをやろう

明治が終わって100年目の今年、私は、昔のように不本意にお上に**服**従することもなく、能力の限界を感じつつも、それなりに自由に思考し行動することができます。放射線防護の専門家としては、当面、目の前の放射能禍を極小化し、子や孫たちの健やかな**育**ちの条件を確保することを願い、当ミュージアムの特別展「放射能と人類の未来」の成功のために努力したいと思っています。正月の京都案内の写真を見ながら、「明治」「服従」「育ち」に含まれる3つの「月」がそれぞれ「月」と「舟」と「肉」に由来するという知的連想を楽しみながら、客人たちが去った宇治の寓居でひそかにそう心期しています。

国際平和ミュージアム20周年の年にあたって

立命館大学国際平和ミュージアム
館長　高杉巴彦

立命館大学国際平和ミュージアムの国際的ネットワークの到達点

2012年早々の1月13日に、立命館大学国際平和ミュージアムは、沿海州国立アルセニエフ総合博物館（ロシア）との間で学術交流協定を締結し、アルセニエフ総合博物館のシャライ館長による「世界平和と諸民族の友好をめざす沿海州国立アルセニエフ博物館の活動について―沿海州地方での日本人捕虜の生活に関して―」と題した記念講演を実施しました（詳細は別掲P.17「事業報告」参照）。

立命館の国際平和ミュージアムは、今までに海外の博物館である侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館と友好協力協定（2003）を、ホーチミン戦争証跡博物館（2004）、ゲルニカ平和博物館（2004）、サマルカンド平和・連帯国際博物館（2004）の3館と学術交流協定を締結し、各館の展示や日本語版作成協力、国際会議開催協力、研究連携など、安斎名誉館長をはじめとする本学複数研究者や本館担当者の努力によって、共同活動の可能性を追求してきました。

またこれらの館を含む「平和のための博物館国際ネットワーク」（International Network of Museums for Peace―INMP）における活動として、1998年に次いで、2008年10月に本学で成功裏に開催した第6回国際平和博物館会議の成果があります。INMPの2010年ジュネーブでの理事会で「アジア地域で立命館大学国際平和ミュージアムがネットワークの要の役割としてイニシアチブを発揮することを期待する。」と位置づけられた事も、アジア太平洋地域とりわけ東アジアにおける「和解と共生」めざす平和博物館の学術交流活動が重要となっていることを示しました。

2010年12月11日に開催した「アジア太平洋・学長平和フォーラム」における「共同声明」では、立命館憲章の精神と立命館大学国際平和ミュージアムの意義が評価されました。

さらに2011年10月14日から16日まで、アジア太平洋平和研究学会（Asia Pacific Peace Research Association, APPRA）が本学で開催され（事務局長：君島東彦国際関係学部教授）、APPRAと、立命館大学大学院国際関係研究科、R-GIRO研究プログラムとともに、立命館大学国際平和ミュージアムが共催し、18カ国・地域から100余名の参加者で成功しました。平和博物館に関するセッションも2つ開かれ、博物館活動を通じた平和教育などが議論され、また学校教育における平和教育のセッションも、附属校の平和教育研究会を中心とした教育実践研究のまとまった発表に成功しました（『国際平和ミュージアムだより』Vol.19-2,P.14～15,2011.12.9参照）。

こうした活動を、新しい「平和創造の博物館づくり」めざす平和学の研究進展に繋げるために、日本・中国・韓国・ベトナム・ロシア（沿海州中心に）などとの交流・連携をさらに進めていくことが求められています。

2012年、立命館大学国際平和ミュージアムは設立20周年を迎えます。

1992年からの20年間の活動において、国際平和ミュージアムは世界初の大学立平和博物館として、立命館大学における平和教育の中核を担うと同時に、前述のように世界の平和博物館ネットワークでの重要な存在として活動してきました。立命館大学の博物館として、「平和と民主主義」（教学理念）、「人類的課題に取り組む地球市民の育成」（立命館憲章）といった理念に基づき、多数の学生・市民の参加・支援を得ながら、平和博物館として「社会的記憶の保全」「平和研究の発信」「平和創造の主体形成」「国際的なネットワーク形成」という任務を果たしてきました。2005年のリニューアル以降、年間5万人余が来館し、2012年には累計で80万人の参観者数となります。日本平和博物館会議の中でもコアの役割を果たし、日本の平和博物館における確固たる位置を築いてきました。

さらに重要なことは、戦争・地域紛争やテロはもとより、貧困や食糧問題、難民問題、環境破壊やエネルギー問題、人権問題など、人類的課題の解決のために主体的に行動する人材の育成であり、2005年のリニューアルによって、この課題についての展示を拡張して来ました。

20周年を迎える国際平和ミュージアムのコンセプトと展望

今までの20年間の活動の到達点を踏まえつつ、2012年からの次の10年、20年を見据えていく必要があります。立命館大学国際平和ミュージアムは、21世紀のグローバル化したさまざまな危機と構造的暴力を直視し、真の地球市民を育成する平和教育への貢献を使命として、人類・自然・すべての生命が真に共生する未来への第一歩を歩み出すための博物館活動を展開することを確認しています。

国際平和ミュージアムの、2012年からの第三ステージの理念を現すキーコンセプトは、「地球市民の記憶と未来。世界へと発信する平和教育の新たな歩み」としました。

20周年を迎える国際平和ミュージアムは、人類の過去の社会的記憶を保存し証言するという平和ミュージアムの使命とともに、未来の平和創造に向けて、立命館大学の教学・研究、平和創造の主体としての学生の参加・参画をうながし、立命館の平和教育の理念と成果を地域・社会・世界に発信し、市民に開かれた社会開放型教育施設として、世界の平和のための博物館とのネットワークを強め、21世紀の人類平和の実現へ向けた平和博物館として新たな展開をする決意をしています。

また、2011年3月11日に東日本を襲った大震災によって露呈された日本における生存のさまざまな危機を正面から見据え、「東日本大震災と福島原発事故以降の、平和概念の再構築」という課題にも積極的に取り組んでいくことを明らかにするものです。

立命館大学国際平和ミュージアムの第三ステージの可能性

国際平和ミュージアムは20周年事業を進めるとともに、第三ステージにおける新たな展示や活動を、リニューアルを含めて大きく展開したいと考えています。

立命館と平和ミュージアムの創立記念日の5月19日（土）には「開設20周年記念式典」を開催し、記念誌『立命館国際平和ミュージアム20年の歩み』の発行によって、平和ミュージアムの過去・現在・未来を示します。11月には平和学術国際シンポジウム「世界と日本における平和研究所の軌跡・課題・可能性」（仮題）を開催し、国内外の平和研究所の現状や課題と、今後の平和学研究や平和博物館の可能性、大学付属の意義についての協議・検討を行う予定です。

開設20周年の特別展示は5月15日より7月27日まで「放射能と人類の未来」のテーマで、今後の日本を生きていく上での「放射能リテラシー」の重要性、これからのエネルギーのあり方を考える企画展を行います。

20周年を機に、平和ミュージアムとしては、若者が地球の未来の平和創造に確信を持って取り組めるよう、元気と意欲の出る展示構成を考えていきたいと思っています。地球の現状や紛争の最前線が見え、同時に現在の地球の人類的課題がリアルに解るようなビジュアルでかつ身体を使って理解できるデジタル技法による展示も検討しています。

また大学の多キャンパス化やＡＰＵ・附属校の存在を含め、図書館などとの連携を重視し、デジタル・ミュージアムとしてのウェブ活用のバーチャルでの理解を進めるニュージアムの工夫も必要となってきます。

一方で平和ミュージアムの「モノ資料」を活用した「授業教材キット」の貸し出しが、2012年春から始動となり、さらに収蔵資料の収集によって手狭になった収蔵庫の拡充整備にも取り組んでいきます。

全学的位置づけの中で、平和教育・研究センターとして、平和ミュージアムが大きな役割を果たすべく準備も進めており、創立20周年を機に、新たな平和ミュージアム像を展開していくつもりですのでご期待ください。

歴史と責任

立命館大学国際平和ミュージアム
副館長 **加 國 尚 志**
（立命館大学文学部教授）

国際平和ミュージアムでは、地階で「一五年戦争」についての資料展示を行っています。その基本的な方針は、アジアへの侵略を行うために国民を戦争へと駆り立てていった総動員体制についての歴史的事実を示し、アジアの民衆を苦しめた侵略戦争の本質を示すこと、そして、敗戦へと至る過程で原爆投下をはじめとする爆撃・空襲などにより、多数の国民（そして「国民」だけではなく、在日朝鮮人やさまざまな外国人）が犠牲となった事実を展示することです。言論の自由を封じ、国民すべてを戦争に協力させるように統制した政治体制がもたらした破局的な結果を冷静に認識することが、あのような戦争を二度と繰り返さないために必要であると言えます。

この中でも、日本軍がアジアで行った加害責任を展示している点が本ミュージアムの特色であると言えるでしょう。一五年にわたる戦争で日本軍が殺戮し、危害を加え、抑圧したすべての人々が一五年戦争の被害者です。日本国内で一五年戦争について展示する際には、被害者からの視線を展示に盛り込むことがとても重要です。

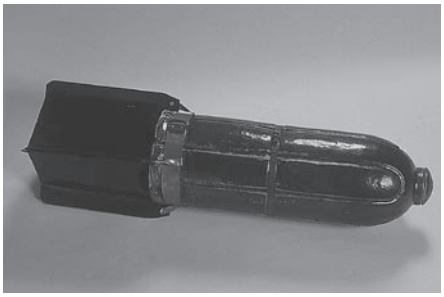
こうした加害責任を展示することは、時には強い感情的反応をひき起こします。「日本人だけが悪いことをしたというのか」「日本軍兵士を犯罪者扱いするのか」といった反応が寄せられることがあるのですが、それは当ミュージアムの展示への誤解に基づくものです。

歴史は、勧善懲悪のドラマでもなければ、美談に満ちたヒューマン・ストーリーでもありません。また、自然科学のように「客観的」事実だけで構成されているわけでもありません。複数の当事者の視点と証言が交差し、異なる価値観による解釈が拮抗し、その複雑な糸の縒り合せから全体的な歴史的構造が見えてくるようになることが歴史的認識と呼ばれるものです。複数的な視点と解釈の相互性に基づいた構造の認識に到達するためには、一つの視点だけを特権化することはできません。国民国家の単眼的な歴史観が今日時代遅れのものとなり、複数の歴史観をつきあわせるグローバルな歴史の語り方が登場したことは、古典物理学から量子力学への展開がそうであったように、人間の認識の進化としてとらえられなくてはならないでしょう。

したがって、国際平和ミュージアムの展示は、日本「国民」が一五年戦争の総動員体制による被害者であったという視点だけから構成されてはいません。侵略された国の人々から見ればやはり加害者でもある、という視点を置くことで、一五年戦争の時代に起こっていたことの歴史的構造を複眼的に認識することが目指されています。その構造は二〇世紀前半における植民地経済と帝国主義であり、その構造に基づいて生み出されたものが軍国主義的国民国家における戦争体制（さまざまな法律や統治機構･統治手段）に他なりません。

国民国家による歴史叙述は、植民地経済と帝国主義の圧政に苦しむ人々の「声」を排除してきました。「支配層」の観点からの歴史叙述は、戦争をはじめとするさまざまな暴力を矮小化し、美談化し、正当化する傾向があります。しかし、戦争の非人間的行為の加害者に加担することは、その被害者に対する二次的加害行為であると言えます。国際平和ミュージアムの歴史展示は、戦争をはじめとする暴力や抑圧の被害者の視点を重視しますが、それは一つの視点を特権化することではなく、従来の歴史観や歴史の語り方から排除されてきた声を尊重するためなのです。

ガヤトリ・スピヴァクは、歴史叙述の外部に置かれる人間たちをグラムシにならって「サバルタン」という概念で提示しました。支配集団に対する従属集団の人々の証言や歴史叙述は今まで無視されがちでしたが、現代の歴史研究はそうした「声」を重視し始めています。すべての戦争の被害者たち、差別や貧困や飢餓に苦しむ人々、人権を否定され、暴力や抑圧に脅かされている人々の、「言説」にならない「声」を、ただ従来の歴史叙述の形式の中に取り込むのではなく、歴史叙述の方法そのものを脱構築するような仕方で提示すること。この現代的な課題のために、当ミュージアムの展示はさらに複数的で重層的な展示を行っていかねばならないでしょう。それは、未来の世代が歴史を複眼的・多声的にとらえ、これまでの国民国家的な歴史観を越えたより大きな歴史と世界の構造の理解に基づきながら、異なる場所で生きる人間たち相互の新しい関係を構想できるようにするために不可欠なことなのです。



宇治式細菌爆弾（複製）

資源・環境をめぐる争奪戦ー武器なき戦争ー

立命館大学国際平和ミュージアム
運営委員　小 幡 範 雄
（立命館大学政策科学部教授）

はじめに

戦争が深刻な環境問題を起こすことは、過去の事例で明らかである。ベトナム戦争時の枯葉剤による陸上生態系破壊、湾岸戦争時の原油流出による海洋生態系破壊、油田破壊による大気環境破壊、そして核爆弾による放射線汚染など枚挙にいとまがない。

ベトナム戦争では、米軍が上空から散布したオレンジ剤などの除草剤にダイオキシン類が含まれており、ベトちゃんドクちゃんに象徴される先天性障害を持った子が多数生まれることとなった。このダイオキシン類はごみ焼却場で塩化ビニールが低温で焼却されると発生する。日本でも大きな問題になった。

湾岸戦争ではクウェートの油井730本が炎上し、二酸化硫黄、二酸化炭素が放出され、ペルシャ湾一帯の大気汚染による動植物、人間への環境影響が懸念された、大規模な調査も実施された。

そして、2011年3月11日に東日本大震災が発生し、福島原子力発電所がメルトダウンを起こし、放射線が大量に大気に放出され、多くの住民が避難を余儀なくされた。それは戦争ではないが、原子力というエネルギーを間違って使えば極めて大きな環境破壊事故になることを証明したのである。

地球の環境容量を超える人間の経済活動

エコロジカル・フットプリントは、経済活動が環境容量の範囲内にとどまったものとなっているかどうかを測定するための指標であり、その定義は、ある特定の地域の経済活動、または、そこに住む人々の一定水準の物質消費レベルの生活を維持するために必要となる生産可能な土地（及び水域）の面積（ある地域で必要とされ資源の要求量を生み出し、排出物質を同化してくれる土地・水域面積）の合計とされている。

エコロジカル・フットプリントは2007年（『生きている地球レポート2010年』）で、全世界で2.7gha／人、アメリカで8.0gha／人、日本で4.7gha／人となっている。世界のバイオキャパシティは1.8gha／人であり、現在の経済活動・物質消費水準は環境容量の1.5倍（2.7gha ÷1.8gha ＝1.5）、つまり50％容量をオーバーし、地球が1個半分ないと世界の人類は賄えないことになる。世界がアメリカと同じような生活をすると、地球は4.4個、日本人と同じ生活レベルであるとすると2.6個いる勘定となる。もう既に環境容量を人間の活動は大きくオーバーしており、資源・食料争奪や二酸化炭素（温室効果ガスの一つ）削減の押し付け合いが起こっている。

食糧については、元丸紅経済研究所所長（現資源・食糧問題研究所代表）柴田明夫は3つの争奪戦があるとしている。第1は、国家間の争奪戦である。例えば、米国と中国の関係である。アメリカは、国内市場の拡大により輸出余力を失う一方、成長著しい中国がすでに新たな食糧輸入大国となりつつある。第2は、エネルギー市場と食糧市場との争奪戦である。急速に進む地球温暖化対策と原油価格の高騰を背景に、世界中でガソリン代替材としてバイオ燃料の導入が始まった。米国のトウモロコシ・エタノールや大豆油を原料とするバイオディーゼルをはじめ、ブラジルではサトウキビ・エタノールの生産が急増している。第3は、工業部門と農業部門での水と土の争奪戦である。工業化は工業用水や生活用水、工場用地や住宅地を拡大する結果、工業に比べ付加価値生産性の低い農業は、次第に限界地に追いやられる。

さらに、世界の産油国の可能な石油生産量（在来型石油）に関してピークオイル仮説が議論されている。仮説は、地質学者のM.キング・ハバートが提唱した資源枯渇曲線が発端となっており、生産量がまもなく限界、すなわちピークオイルに達し、その後生産量は減少の一途を辿らざるを得ないとする主張である。計算上、ピークオイルは実際に採掘可能な石油の量により、2026～2047年の間に起きるとしている。やや保守的なほかの予想でも、ピークオイルは21世紀前半に訪れるとされており、世界的な消費増大により、ピークを超えたあとの曲線が急速に低下する恐れがある。

温室効果ガスの削減も非常に大きな問題となったままである。2011年12月11日に閉幕した第17回国連気候変動枠組条約締約国会議（COP17）は、2013年以降の温暖化ガス削減の枠組みについて、温暖化ガス削減量を定めた京都議定書の延長と、その後の新たな枠組みは2020年に中国や米国を含む新枠組みを発効させることで合意した。COP17が京都議定書の延長を決定したが、今の京都議定書では世界の温暖化ガス排出量の1～3位を占める中国、米国、インドが義務を負っていない。さらに、カナダ政府が12月12日、温暖化ガスの歳出削減を定める京都議定書から正式に脱退すると表明したため、世界の排出量の70％を超える量が削減対象外となったのである。京都議定書を延長しても効果がほとんどないことは明らかである。世界の気候、農業、健康、生態系、経済活動にも大きな影響を及ぼす温暖化防止対策の国際的協調の難しさを知ったところである。

資源をめぐる争奪戦

エネルギー・鉱物・食糧などの資源を巡る問題が地域情勢の流動化の遠因となっていることも明らかであろう。もちろん、食糧価格の高騰は干ばつをもたらした異常気象、あるいは投機といった一時的要因も大きい。しかし、長期的には中国やインドなど新興国の飛躍的経済成長や途上国の人口増大に起因する食糧需要の増大に生産が追いついていかないという構造的問題である。世界の漁業資源の1／3は中国で消費されている。エネルギー価格の騰貴もそのような構造的要因がある。

日本の海外への資源依存は他に例をみない。日本は1次エネルギー供給の8割を輸入に依存し、原油輸入の9割を中東に依存している。銅、アルミ、鉄、レアメタル7鉱種は100％海外に依存している。そして食糧供給の6割は海外に依存しているのである。日本にとって資源安全保障は国家の存亡がかかる。

この資源・エネルギーの安定的な需要・供給バランスや配分を巡っては、包括的な戦略を構築していかない限り、対処していくことはできないと思われる。

生産と廃棄をトータルにみるエントロピー

資源・エネルギーの枯渇は現実のものとなりつつある。この使用を適切に誘導しなければならない。ここでは、ものを生産する過程で投入する資源･エネルギーと廃棄される不要物を同時にみるエントロピーの考え方を紹介しよう。

エントロピーには次の2つの法則がある。第1法則は、エネルギー保存の法則である。宇宙の全エネルギーは一定であり、創生・消滅することはない。石油を燃やせば、熱を出し二酸化炭素（CO2）と水蒸気（H2O）になる．これらは散らばるが天空を含めて地球上のどこかにある。なお、資源はエネルギーと等価とし、エネルギーに含めて考える。第2法則はエントロピー増大の法則である。自然な過程では、エネルギーの価値は退化する方向すなわちエントロピーが増大する方向に進む。石油を燃やしても、第1法則によりエネルギーの総量は変わらないが、石油としての直接的な利用価値は消滅する。このように、エネルギーの価値は、退化する方向に進み回復されることはない。

資源やエネルギーをはじめあらゆる物、地球すらも有限であり、すべては熱力学のエントロピーの法則に従っている。この法則によれば、物質とエネルギーは1つの方向のみ、すなわち、使用可能なものから使用不可能なものへ、あるいは利用可能なものから利用不可能なものへ、あるいはまた、秩序化されたものから無秩序なものへと変化するというもので、宇宙のあらゆる物はこの法則に従っている。すなわち、万物はみなエントロピーが増大し、利用可能なものから利用不可能（カオス）なものへと移行するのである。

この考え方で生産過程を見ていこう。従来の生産の考え方では、原材料の原料資源から商品を取り出しており、原料資源は、人間の手にかかれば商品というより低い物質エントロピーの物質に生まれ変わるように見える。ところがここには重要なことが隠されている。例えば、鉄鋼を生産するには鉄鉱石、石灰石、コークスを投入し、さらに電力、重油、淡水などの投入が必要となる。要するに、化石エネルギーなどの低熱エントロピー資源と淡水などの低物質エントロピー資源、つまりこれら低エントロピー資源の投入があってはじめて生産が可能となるのである。さらに重要なことは汚水、廃物など様々な環境負荷を与える高エントロピーな副産物が発生することである。このように生産過程では実に多くの低エントロピー資源を使っている。原料資源の方は商品として手元に残り、消費のあと廃棄した時点で、高エントロピーを生産し消費が完了することになる。

環境負荷低減策の一つにゼロエミッションがあるとされている。これはある生産過程で排出された廃物・廃熱を別の生産過程で利用し、これらをゼロに近づけていく試みである。トータルの環境負荷は減らせるが、低エントロピーを使用するので抜本的な対策とはならない。熱力学の法則を打ち破るようなシステムはないのである。

ある国が電化製品を生産し、別の国が完成品を輸入した場合、家電製品を生産する過程での材料投入や加工に伴う水やエネルギーの消費に伴う資源消費やエントロピー増大は生産国内で生じることになる。輸入国は使用段階のエネルギー消費だけ生じることになる。資源・エネルギーの使用とそれに伴う環境負荷の発生の適切化は、システムの境界をどのように設定するかという問題を合わせて考えなければならないのである。全世界で見れば問題はないのであるが、国別に見れば大きな問題が生じる。エントロピーのような環境負荷統計の場合、アジア環境圏域、ヨーロッパ環境圏域など新しい区分も必要になると考えられる。

中東地域での大量油井火災
（http://www.agr.okayama-u.ac.jp/forestecology/kakuti.html）

『女たちがつくるアジア』

松井やより著（岩波新書　1996年刊）

立命館大学国際平和ミュージアム
運営委員　遠 山 千 佳
（立命館大学法学部准教授）

©岩波新書

私が本書と出会ったのは、今から14年ほど前、海外派遣日本語教育専門家の集中研修期間においてでした。私はフィリピンに派遣されることが決まっており、その他には、インドネシア、インド、モンゴル、香港、韓国など、私をはじめ、本書の舞台となっている国々に派遣されるメンバーも多く含まれていました。21世紀を迎える前に書かれた本書を、なぜ今取り上げたかというと、昨年の3・11の地震・津波と原発事故の大災害の背景に、本書の本質がつながっていると思えたからです。

私たちが「平和」とは何か？と考えるとき、過去の戦争や国境を隔てた別の国の争いを思い浮かべることが多いと思います。しかし本書を読むと、平和を脅かすものは、私たちが当たり前だと思っている便利な日常生活そのものの中にも潜んでいるという事実が鋭く突き刺さってきます。本書では、めざましい経済発展や「開発」という名の下に引き起こされる、「貧困」や「暴力」、「環境破壊」、そこから生じるエイズや事故など生命の危機などが、渦巻き再生産されていく悲惨な現状が描かれ、その原因として、私たちの営む日本社会が深く関わっていることが指摘されています。しかし同時にそのような苦しい渦中にいながら、たくましく現状と闘い、「自立、連帯、配慮（ケア）、共有、多様性（p.226）」といった女性原理によって豊かな共生社会と人権を回復し、社会を変化させていく女たちの姿が描かれています。もちろん男性が常に管理、搾取の立場にいるということをいっているわけではありません。本書に挙げられている男性原理は、「支配、競争、能率、収奪、画一化（p.225）」といった開発と破壊につながる、企業中心のものとして捉えられていますが、21世紀の日本では、これらの原理の枠組みは、男性・女性という分け方とは合わなくなってきているかもしれません。特に3・11以降、男性原理（企業中心原理）の存在に対して、男女に関わらず著者のいう女性原理の主張が増えているように感じます。ただ3・11の大災害が日本で起こる前から、企業中心原理が既に海外で破壊を進めていたことにもっと早く多くの人が気づくべきだったのかもしれません。

企業中心原理の1つとして最初に紹介されているのは、日本に人身売買され、エイズに感染させられた上、犯罪者として逮捕され、マスコミによって人間としての尊厳や家族さえも奪われてしまったタイ女性のリポートです。この一連の流れは人身売買の時点から日本人の需要によって引き起こされています。特別ではなく、普通と思われている日本人の需要です。私がフィリピンで出会った、日本に出稼ぎにいったある女性は、日本人客に教えてもらったというジョークを次々に日本語で披露してくれました。耳を塞ぎたくなるようなその内容と、それに相反する彼女のくったくのない笑顔と話しぶりに、どう反応してよいのか困ってしまったことを思い出します。事件としても戦争としても扱われないところに、「貧困」や「暴力」が絡み合って日常化しているのです。この他、エイズ、国際移住労働、日比混血児、家庭内暴力などのテーマが扱われています。

続く章では、ODA などによる大規模開発によって、豊かな自然がつぶされ生活の場を追われる住民の実態が描かれています。開発によって得られる水産物や農産物は輸出先の国の人たちを豊かにします。「だれのための開発ですか」「外国企業の利益のために（中略）（住民の）生活を犠牲にするのは開発侵略ですよ」「日本はかつては軍事侵略、そして今は開発侵略をやっているのではないですか。」（p.94-95）と問いかける元住民は、猛烈に働いている日本人に自分たちの支払う税金がどのように使われ、それが現地の人にどのような影響を与えているのか知る努力をしてほしいと述べています。そして土地を奪われ、血と涙を流した先住民族の犠牲にも関わらず、日本ではその土地の木材を使った建材や家具が使い捨てられていることを指摘しています。海外旅行のための観光開発も、自然資源、環境、女性や子供（売春）、物価、文化などを直撃しています。

著者の松井やよりさんは、痛みを分かち合う力や、生命や自然をいとおしむ力、新しい文化と価値を創造する力などをつけていくことが未来のビジョンを開くと主張しています。今の当たり前の生活を振り返り、世界中の誰もが人間らしく生きられる社会にしていくには何が必要なのかを考える大きなヒントが本書に込められています。グローバル化が進んでいる今だからこそ、男女の区別にとらわれず読んでいただきたい1冊です。

開催報告
(2011年10月～2012年1月)

今号では2011年10月から2012年1月の間に開催しましたミニ企画展示をご紹介します。

第69回
「第5回立命館附属校 平和教育実践展示」

2011年10月16日(日)～12月25日(日)

毎年秋・冬季に実施している、立命館各附属校の平和教育実践展示は2006年度より開始し、今年で第5回目を迎えました。展示物を通じて初等・中等教育段階での平和・人権教育の実践内容を紹介することで、今日の小学生、中学生、高校生の平和・人権課題に対する意識、現代社会や世界との関わり方に対する認識を、広く知ってもらおうとするものです。2011年度は下記の日程で開催しました。

[日程と展示内容]

①立命館中学校・高等学校

会　期：10月16日(日)～10月28日(金)
テーマ：「立命館中高における平和教育実践」
内　容：中学生・高校生によるカンボジア・タイ・ベトナムの海外研修の報告と、その研修を活かして授業内で取り組んだ課題作品、および沖縄平和教育研修旅行事前学習の成果を展示。

立命館中学校・高等学校の展示の様子

②立命館宇治中学校・高等学校

会　期：10月30日(日)～11月11日(金)
テーマ：「立命館宇治中学高校のアクティブな平和教育」
内　容：平和な東アジア構築を目指して日中韓の青少年が交流するキャンプに参加した中学校の生徒たちの報告や、中学2年生による平和に関するトピックのポスター展示。さらに、高校3年生の東日本大震災の被害者の方へのメッセージを紹介。

③立命館小学校

会　期：11月13日(日)～11月25日(金)
テーマ：「立命館小学校平和教育の取り組み」
内　容：小学校4年生が実践した平和学習の成果をポスター展示し、それらを中心に立命館小学校の平和教育への取り組みを紹介。

④立命館守山中学校・高等学校

会　期：11月27日(日)～12月9日(金)
テーマ：「立命館守山中学校の『平和学』」
内　容：近年の平和学の結果としての「平和でない状態」を中学2年生の視点から考え、ポスター展示。

立命館守山中学校・高等学校の展示の様子

⑤立命館慶祥中学校・高等学校

会　期：12月11日(日)～12月25日(日)
テーマ：「北の立命館発2011～地球市民の想い～」
内　容：中学生による『碑』の広島二中の生徒たちに向けたメッセージや、高校生による広島・知覧などへの平和研修フォトエッセイ、海外研修報告ショートフィルム、美術作品「メッセージタワー」などを展示。

各校の展示の様子は、P.19でも紹介しています。

第70回
「ミュージアム・この1てん　紙芝居『宣戦』」

2012年1月11日(水) ～1月25日(水)

立命館大学国際平和ミュージアムの収蔵品を紹介する「ミュージアム・この1てん」。今回は真珠湾攻撃の1周年にあたり発行された紙芝居『宣戦』を展示しました。

今でも子ども達が楽しく鑑賞する紙芝居は、戦時中、戦意昂揚のためのメディアとして活用され、それらは国策紙芝居と呼ばれています。会場には体験用の国策紙芝居（複製）数点を併せて設置し、紙芝居という身近な存在から、戦争と平和を考える機会になればと開催しました。

紙芝居『宣戦』は、前号の『国際平和ミュージアムだより』(Vol.19, no.2)の「スポット　ミュージアムの収蔵品51」でも紹介しています。

紙芝居展示の様子

世界報道写真展2011 － WORLD PRESS PHOTO 2011－

～立命館大学衣笠キャンパス（KIC）会場～
会　期：2011年9月21日(水)～10月16日(日)
会　場：立命館大学国際平和ミュージアム
　　中野記念ホール
参観者：7,065名

公開記念講演会
テーマ：「3・11を記録し、記憶するために」
講　師：豊田直巳氏（フォトジャーナリスト）
日　時：2011年10月4日(火)　14：40～16：10
会　場：立命館大学衣笠キャンパス　存心館801
聴講者：171名

～立命館大学
**　びわこ・くさつキャンパス（BKC）会場～**
会　期：2011年10月18日(火)～11月3日(木)
会　場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス
　　エポックホール
参観者：2,669名

公開記念講演会
テーマ：「3・11被災地、紛争地から看取りまで
　　～命のバトンを受け継ぐために」
講　師：國森康弘氏（フォトジャーナリスト）
日　時：2011年10月18日(火)　12：15～12：45
　　2011年11月3日(木)　12：15～12：45
会　場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス
　　エポック立命21　1階ロビー
聴講者：10月18日(火) 58名、11月3日(木) 79名

主　催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社世界報道写真財団
後　援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会、公益社団法人日本写真家協会
　　京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会
　　NHK京都放送局（衣笠キャンパス開催分）
　　KBS京都
　　滋賀県、草津市、大津市、滋賀県教育委員会
　　草津市教育委員会、大津市教育委員会、
　　NHK 大津放送局（びわこ・くさつキャンパス開催分）、びわ湖放送株式会社
協　賛：キヤノンマーケティングジャパン株式会社
　　ティエヌティエクスプレス株式会社

立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）会場の展示の様子

～立命館アジア太平洋大学（APU）会場～
会　期：2011年11月6日(日)～11月20日(日)
会　場：立命館アジア太平洋大学　本部棟2階
　　コンベンションホール
参観者：2,723名

主　催：立命館大学国際平和ミュージアム
　　立命館アジア太平洋大学、朝日新聞社
　　世界報道写真財団
後　援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会、公益社団法人日本写真家協会
　　大分県、別府市、大分県教育委員会
　　別府市教育委員会、NHK 大分放送局
　　大分合同新聞社
協　賛：キヤノンマーケティングジャパン株式会社
　　ティエヌティエクスプレス株式会社
　　別府商工会議所、社団法人別府青年会議所
協　力：大分交通株式会社、亀の井バス株式会社

世界報道写真展は、4月のアムステルダムを皮切りに、1年を通じて45の国と地域、約100都市で開催される世界最大規模の写真展で、今年54回目を迎えました。

125の国と地域から10万8千点を超える作品の応募があった今年は、9つの部門でのべ54人の写真家が入賞しました。その中で、世界報道写真大賞2010には「ポートレート」の部で入賞した南アフリカの写真家、ジョディ・ビーバー氏がアフガニスタン人の女性を写した作品が選ばれました。その写真は反政府武装勢力タリバーンの命令で、夫によって耳と鼻を切り落とされた女性の悲惨な経験を強く印象づけるとともに、尊厳に満ちた一人の女性の姿を余すところなく伝えています。

なお、会場の一角で、3月に発生した東日本大震災の被災地の様子を撮影した作品をスライドショーで展示し、併せてご覧いただきました。

衣笠キャンパス、びわこ・くさつキャンパスともに、多くの方々にご来場いただき、盛況のうちに終了することができました。今年は衣笠会場に豊田直巳氏を、びわこ・くさつ会場に國森康弘氏をお招きし、講演会を開催いたしました。豊田氏には、福島原発を取材された体験談を、写真上映と共にお話しいただきました。真実を知ることの重要性と、そのためにまずは自分から動いてみるべきだと説かれた熱のこもった講演に、聴講者は熱心に耳を傾けていました。國森氏は講演の中で、ソマリアの紛争地から東日本大震災、またお年寄りの看取りの現場の写真を紹介されました。これらのさまざまな「死」を通して、生命とはなにか、どうあるべきなのかを問いかけておられました。

本展および本講演会を通じて、来館者のみなさまには、世界の「今」を見つめ、報道写真家のメッセージを感じ、いま一度平和とは何かを考えるきっかけにしていただけたものと考えております。

世界報道写真展参観者の感想　衣笠キャンパス会場

●世界の抱える様々な課題の一瞬一瞬を切り取り、私たちへメッセージを伝えてくれる写真の魅力に改めて感動しました。それと同時にその課題の1つ1つが人類にとって悲しく残酷なものであることを痛感しました。日々の生活の中では意識しづらいことが、この写真展を通して改めて考え直すきっかけにもなりました。「知らないことが最大の罪」というのは、もしかしたら言い過ぎている部分もあると思いますが、これらの写真に映る「真実」「事実」「現実」は、私たちがこれからもずっと考え、直視していかなければならない問いだと感じました。（本学学生、20代、男性）

●目をそらしたくなるような写真が何枚もあったけれど、日本という比較的平和な国に住む私たちは「現実と向き合う」ことを忘れてはいけないのだと思いました。映像よりも深く考えさせられた気がします。（本学学生、10代、女性）

世界報道写真展参観者の感想　びわこ・くさつキャンパス会場

●偶然通りかかり入館したのですが、想像をはるかにこえるものを見た気がしました。普段テレビで見ているニュースからは想像がつかない世界の出来事がたった1枚の写真から目に浮かぶように感じられました。正直、写真のチカラがここまであると思いませんでした。（本学学生、10代、男性）

●去年、何となく来た報道写真展。とても印象的で、「来年も絶対来よう」と思いました。今年の写真も興味深いものばかりで、とても感じるものがありました。この写真展は非日常から日常まで、秀逸な作品が集められていて、普通の写真展とは違った雰囲気があり、そこが大好きです。貧困国や災害に見舞われた国の様子、紛争地帯の写真は、普段私たちが目にしない、各々の現実を見せ付けられます。自身の無知と幸福さを思い知ると共に、自身の生活を振り返らされます。“アート＆エンターテイメント”や“スポーツ”の写真は、一瞬の美しさ、勇しさを感じさせ、日常で見逃している“一瞬”を思わせてくれます。私個人で世界を変えることはできませんが、この写真展の世界は毎年、私を変えていると思っています。（本学学生、10代、女性）

豊田直巳氏講演会の感想　衣笠キャンパス会場

●私たちが知っている情報は、日本が報道を許している範囲内です。私は疑いもなくその情報がすべてのことだと思って、「知ったつもり」でした。しかし、今回の講演で、事実は自分で探さないとわからないことを実感しました。事の重大さを知ることができました。また、事実を隠す政府を疑うことも大切だと思いました。今まで私たちは電気に頼って生きていました。不足するなんて考えたことなかったのに、原発事故より（計画）停電があって、自分の生活を見直すことができました。しかし、関西へ来て、生ぬるい空気が流れていて、国内での温度差に不安を感じています。（本学学生、10代、女性）

●震災による原発からの放射能漏れ、そしてそれに対して恐怖が消えないということを第二次世界大戦の原爆投下と重ねながら心底考えさせられました。特に映像にあった酪農家の「原発さえなければ」という言葉は、非常に重々しく響きました。原発の事故、放射能の恐怖は、被災者でなくとも決して目を背けてはならないことだと思います。（大学生、10代、男性）

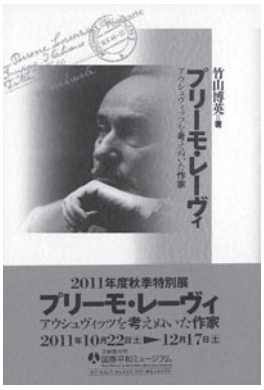
國森康弘氏講演会の感想　びわこ・くさつキャンパス会場

●震災の写真やイラクでの写真は、今ある社会問題を考えなければならないと強く訴えるもので、非常にその意味で良い写真であったと思いました。（本学学生、20代、女性）

●悲しい死ばかりではなくて、幸せな死も取材して自分の中で感情のバランスを取っていると言っておられたのが印象的でした。戦地での死を、どこかお話の世界だと思ってしまっている私たちにも、災害や突然の何かで準備なしで死に直面することもあるんだと、改めて考えさせられました。（本学学生、10代、女性）

プリーモ・レーヴィーアウシュヴィッツを考えぬいた作家ー

会　期：2011年10月22日(土)～12月17日(土)
会　場：立命館大学国際平和ミュージアム　中野記念ホール
参観者：12,715名
主　催：立命館大学国際平和ミュージアム
協　力：イタリア文化会館、プリーモ・レーヴィ研究センター
　　立命館大学文学部
監修・協力：竹山博英（立命館大学文学部教授）
後　援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
　　京都市内博物館施設連絡協議会、NHK京都放送局、KBS京都
　　朝日新聞社、京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社
　　朝日新聞出版、岩波書店、言叢社、NPO京都コミュニティ放送



特別展「プリーモ・レーヴィ」
関連書籍（カタログ）
（竹山博英著　2011年10月、言叢社）
ミュージアムショップでも販売中です。

関連企画　公開記念講演会

会　場：立命館大学国際平和ミュージアム　1階ロビー
コーディネーター：加國尚志氏（立命館大学国際平和ミュージアム副館長・
　　立命館大学文学部教授）

「プリーモ・レーヴィーアウシュヴィッツを考えぬくことー」
日　時：2011年11月5日(土)　13：30～15：00
講　師：竹山博英氏（立命館大学文学部教授）
聴講者：105名

竹山博英氏

「断絶の証言者プリーモ・レーヴィ」
日　時：2011年11月12日(土)　13：30～15：00
講　師：徐京植氏（東京経済大学現代法学部教授）
聴講者：138名

徐京植氏

「"人間であることの恥"ふたたびー2011年の経験から」
日　時：2011年11月19日(土)　13：30～15：00
講　師：鵜飼哲氏（一橋大学大学院言語社会研究科教授）
聴講者：80名

鵜飼哲氏

2011年10月22日(土)から12月17日(土)までの約2か月間、2011年度秋季特別展「プリーモ・レーヴィーアウシュヴィッツを考えぬいた作家ー」を開催しました。

ユダヤ系イタリア人のプリーモ・レーヴィ（1919ー1987）は24歳のときにアウシュヴィッツに送られ、その苛酷な環境を生き抜き、1年後奇跡的に生還しました。以後彼はイタリアで化学者として働きながら自身の体験をつづり、作家としてアウシュヴィッツという地獄を冷静に記録するのと同時に地獄を体験したのちの困難な生を描き、さらにはアウシュヴィッツの意味を生涯にわたって問い続けました。深い洞察に満ちた彼の作品や証言は、人間の暴力性とそこからの回復を考える際の貴重な手がかりとして、思想家や芸術家をはじめ世界で多くの人々に影響を与えています。

しかし、これまで日本ではレーヴィが紹介される機会はあまりありませんでした。今展は、日本で初めて本格的にプリーモ・レーヴィを紹介する展示としてメディアでも広く取り上げられ、これまでのレーヴィの読者や研究者のほか、今展を通して初めてレーヴィを知った方にも多数来場いただきました。長時間会場に足をとどめ資料や解説を見入る参観者の方も多く、レーヴィが投げかけた問いや作品の魅力を多くの方に受け止めていただく機会となりました。

また3週連続で開催された公開記念講演会では、加國副館長をコーディネーターに、今展の監修・協力の竹山氏をはじめ、レーヴィの思想や作品に詳しい研究者を講師として招き、各氏のレーヴィ像や知識人としてレーヴィの思想に触発されたことなどを語っていただきました。

初回の11月5日(土)、竹山氏は「プリーモ・レーヴィ－アウシュヴィッツを考えぬくこと－」と題して、自身がレーヴィと対面したときの思い出なども交えながら、レーヴィの生涯に寄り添い、最後は自殺という悲劇で幕を閉じた彼のアウシュヴィッツ以後の苦悩や葛藤を思いやりつつ、レーヴィの人生について語りました。

2週目の11月12日(土)は、「断絶の証言者プリーモ・レーヴィ」とのタイトルで、徐氏は、レーヴィの作品『休戦』が映画化された際、ラストシーンが改変されてしまった事例などを紹介しながら、想像を絶する体験を他者に伝えることの難しさ、証言者の孤独という観点からレーヴィの絶望を語り、しかし、それでも語り続けた彼の姿勢を高く評価しました。

最後の鵜飼氏は、11月19日(土)、「"人間であることの恥"ふたたび－2011年の経験から」として、今年の「アラブの春」や東日本大震災、福島原発事故なども考察に含めながら、「人間であることの意味」について考え続けたレーヴィの思想について論じました。

それぞれの講演会で、これまで日本であまり紹介されることのなかった作家、プリーモ・レーヴィを通じて語られる人の魂が破壊されること、それを乗り越えること、乗り越えることのできない傷という深く重いテーマに聴講者たちは傾聴し、その感銘は毎講演会後の熱心な質疑応答にも表れていました。

特別展見学者の感想より

●「プリーモ・レーヴィ」という人物を初めて知ったが、日本では紹介されていないだけでアウシュヴィッツを考える上ではとても重要な人物であることに驚いた。今度、彼の著作を読んでみようと思う。
（10代女性、大学生、京都市）

●非常に興味深かったです。今までの自分の認識をかなり深められました。また、要所でアウシュヴィッツからの寄贈品（子供の靴など）のあったことが、すごく自分に衝撃を与えました。何より、たくさんの「なぜだったんだろう」という感情を起こさせました。
（20代男性、大学生、大阪府）

●通常の平和展示にはあまりないような「伝えること」「考え抜くこと」に焦点が当てられていたという印象を受けました。レーヴィが我々に何を残してくれたのか、我々はどう平和を考え、伝えるべきなのか深く考えさせられました。
（20代女性、大学生、京都市）

●プリーモ・レーヴィについてはこの展示を通じてはじめて知った。日本での本も紹介されていたので、読んでみようと思う。物事を深く洞察する眼（心）に感心すると同時に、人間を人間と思わない（ナチスの）行為の行きつく果てに怖さも感じた。命あってこそ、平和あってこその自分の存在を思う。
（60代男性、団体役員）

●プリーモ・レーヴィについてよくわかるような展示の工夫がよかった。強制収容所から生還した人たちは皆それぞれの戦後があるが、一様に苦悩を抱えていると思った。このような、苦しみの消えない人生を送らせる状況は二度と作ってはならない！の思いをいっそう深めた。
（60代女性、教育関係者、京都市）

公開記念講演会の感想より

●本を読むだけではわからない、レーヴィの人生とか考え方、歴史について概観することができました。これから著作を読むにあたって、読み方が変わるような気がします。いい勉強になりました。
（30代女性、教育関係者、京都市）

●この特別展・連続講演会のポスターを見たときはとてもうれしかったです。プリーモ・レーヴィはもっと知られていい作家ですし、その著作はもっともっと読まれていいと思います。プリーモ・レーヴィに詳しい先生方の各々の切り口の講演に、その思いをいっそう深めました。
（50代男性、会社員、京都市）

●証言の不可能性というと希望がないように感じますが、私は被爆者の方の証言を何度も聞かせてもらう機会がありました。すべてを感じ、知ることは不可能だと思います。しかしそれを踏まえたうえで、何かを感じとり、伝えていくことが大切だと感じます。
（10代女性、大学生、京都市）

●プリーモ・レーヴィは、映画「遥かなる帰郷」を淀川長治氏が紹介されていたので知りました。その際映画を見てより彼の人生と著作に興味がわき、さらに2003年、徐京植氏がNHKのドキュメンタリーでレーヴィの人生をたどっておられたので、強く印象を受けました。今回講演を聞けて本当によかったです。
（20代女性、大学院生、大阪府）

●現在進行形の問題とからめた、わかりやすいお話だった。今後も私たちのもつ「人間であることの恥」を忘れないように、たえず意識して考えることをやめないようにしたい。
（20代男性、大学生、京都市）

「平和って　なに色？」文字・活字文化の日　特別企画

10月27日は「文字･活字文化の日」。2005年（平成17年）「文字・活字文化振興法」の施行により制定されました。文字・活字文化が人類の知識および知恵の継承や、豊かな人間性の涵養、健全な民主主義の発達に欠くことができないものであり、国民の間に広く文字・活字文化についての関心と理解を深めることを目的としたものです。

国際平和ミュージアムと白川静記念東洋文字文化研究所（白川研）とは、平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和ってなに色？　文字・活字文化の日　特別企画・一字で表す平和へのメッセージ」を、2011年10月27日(木)～11月3日(木・祝)に行いました。この催しでは、一字とその字にこめた平和へのメッセージを７色のカードに書いてもらいました。いかにも、というものから、一見意外な、しかし奥が深いなと思えるものまで、挙げられた漢字は76種類。また同じ漢字でも、様々なイメージ・思いがこめられていました。今年も多数の小学生が真剣に考えたメッセージを寄せてくれました。大変頼もしく、彼らがこの気持ちを持ち続けられる環境を整えることが、大人の責務でしょう。

メッセージを書いてくださった方には、「平和って なに色？」漢字カードを１枚ずつ差し上げました。これは、白川研が制作したもので、虹の七色等10種類の漢字について、古代文字やその成り立ち等を解説したものです。平和を願う心と漢字への興味をもつきっかけになればと願っています。

メッセージ

「一字で表す平和へのメッセージ」まとめ

総数　292のメッセージが寄せられました。

◆ランキングトップ5とコメント

①命（24）…命を大切に思うと平和になると思う。
いらない命はないから。

②笑（23）…みんなが笑顔ですごせることが平和だと思います。
心に笑が満ちますように。

③平（21）…平和と平等になってほしい。すべての国の国民が生きること。

④楽（20）…「楽」は「たのしい」と思わせる意味もあり、「らく」という意味もあるので、世界的に平和だと思う。

⑤幸（17）…昔の人はつらかっただろうから幸せを求めてほしいです。
戦争も暴力もない場が「幸」だと思えるから。

◆トップ5外から

絆…外国で仕事をしている子どもがいるので、その人たちが助け合って絆を深めてもらいたいです。

優…世界中の人が優しくなったらケンカもなくなるから、平和。

心…心は一番きずつきやすい物だから、だれもがやさしい心をもってほしいから。

愛…この地球が戦争をしても、地球でいられるのは「愛」があるから。

無…せんそうが「無」いと、ぎせい者も「無」くなるから。

国…国を平和にしていきたい。せんそうなんかしたくない国へと変えていきたい。

体…体があるだけであたりまえだと思うけど、すごくいいことだと思います。

第58回不戦のつどい
「わだつみ像」前集会＆わだつみ平和文庫
資料寄託記念「わだつみ不戦の誓い」展

【会　期】2011年12月9日(金)～17日(土)
【会　場】立命館大学国際平和ミュージアムロビー

第二次世界大戦中、10万人を越える学生が出陣し、多くの若者が将来への夢・希望を胸の内に秘めたまま、戦地に散っていきました。これら戦没学生の「嘆き」「怒り」「苦悩」を表現した戦没学生記念像「わだつみのこえ」（わだつみ像）が立命館大学に建立されています。

立命館大学では、12月8日(木)びわこ・くさつキャンパス「嵐の中の母子像」前、12月9日(金)国際平和ミュージアム「わだつみ像」前において、第58回不戦のつどい「像前集会」が開催されました。

わだつみ像除幕式（1953.12.8）
前列右から、柳田謙十郎、本郷新、末川博、中村克郎

今年のわだつみ像前集会では、戦没学生の一人である中村徳郎氏、その遺志を受け継ぎ、戦没学徒の手記『きけ　わだつみのこえ』の編集を推進した弟、中村克郎氏が収集した資料を所蔵する「わだつみ平和文庫」から約50点の貴重資料が立命館大学に寄託されたことを受け、中村克郎氏の長女であり、「わだつみ平和文庫」（甲州市塩山）代表の中村はるね氏が出席されました。中村はるね氏は、「当時大学生だった伯父（中村徳郎氏）の資料を立命館大学が受け入れてくださり、伯父は67年ぶりに大学に戻ることができた。若人は世界平和のためがんばってほしい。」とスピーチされた。「像」前には、多数の市民、学生や校友、教職員が参列し、「不戦の誓い」を新たにする集会となりました。

第58回不戦のつどいの様子（2011.12.9）

※中村克郎氏は2012年1月22日にご逝去されました（享年86歳）。

2011年長崎青少年ピースボランティアとの平和交流を行いました！

2011年12月10日(土)～11日(日)に、長崎青少年ピースボランティアの7名（高校生5人・社会人2人）が関西・京都で同世代の生徒・学生らと平和学習・交流を行いました。

6回目の実施となった今年は、京都府内の高等学校等4人、立命館大学の学生・留学生7人、引率教職員を合わせて、全体で23人の参加となりました。

初日のミュージアム見学を踏まえて、二日目には、安斎育郎国際平和ミュージアム名誉館長から、「平和と何か？震災をこえて生きる―私たちに何ができるか？」と題し平和講義をして頂きました。

その後の平和交流会では、長崎から、長崎ピースボランティアの活動紹介、被爆の実相について報告がありました。京都の高校生からは、クリスマスに行うピースキャンドルの取り組みが紹介されました。この取り組みは、白い紙コップに平和のメッセージを記入し、中にキャンドルを入れ点灯し、鴨川の三条大橋河川敷から平和発信をするものです（2011/12/24(土)18：00～実施）。立命館大学の学生ミュージアムスタッフからは、国際平和ミュージアム2階での展示解説活動に加え、NGO ワークショップ企画の取り組みが紹介され、加えて国際平和メディア資料室での寄贈・寄託資料の整理の仕事やそれを活用した展示活動の取り組み、特別展受付業務などが紹介されました。

二つのグループに分かれてからの交流では、自己紹介と小学生の時から今までどのように平和に関する学習をしてきたのか、また京都から参加した大学生は、滋賀、岐阜、鹿児島と出身地が広範囲なので、自己紹介に加え自らの体験として、地域で何を学んできたのか等、意見交換をしました。韓国からの留学生が参加したグループでは、韓国での歴史教育についても紹介がなされ、日本国内から国外へと視野がぐっと拡大しました。日本の地域毎での取り組みの違いや、韓国からみた日本への原爆投下について、直接意見交換ができ、有意義な時間となりました。

短時間の交流ではありましたが、平和を願う気持ちはみな同じだということ、その思いから個々が多様な取り組みをしていることも理解、共有することができました。

テーマに沿ってグループでの意見交換の様子

沿海州国立アルセニエフ総合博物館(ロシア)との学術交流協定締結・記念講演開催

第7回国際平和・人権連続セミナー～平和の諸相を見る

「世界平和と諸民族の友好をめざす沿海州国立アルセニエフ博物館の活動について－沿海州地方での日本人捕虜の生活に関して」

2012年1月13日(金)国際平和ミュージアムにおきまして、沿海州国立アルセニエフ博物館(ヴィクトル･アレクセーヴィッチ・シャライ館長）と立命館大学国際平和ミュージアム（高杉巴彦館長）との間で、学術交流協定が締結されました。

学術交流協定調印式には、今回の縁を取り持っていただきました日本ユーラシア協会副会長、大阪府連会長の荒木瑩子氏、同協会京都府連会長の長砂實氏（関西大学名誉教授）、同協会京都府連副会長の芦田文夫氏（立命館大学名誉教授）にもご同席いただきました。

調印式においては、両館の館長より相互の博物館活動を通じて、アジア太平洋地域の平和構築についての決意が強く表明されました。

引き続き、シャライ館長による記念講演「世界平和と諸民族の友好をめざす沿海州国立アルセニエフ博物館の活動について－沿海州地方での日本人捕虜の生活に関して」が開催されました。日ロ友好を進めていくうえでも、当時のシベリア抑留における日本人の生活についての理解を深め、資料に基づく具体的かつ詳細にその実態について講演が行われました。学生、教職員など約60名が熱心に聴講しました。

司会：出口雅久
（平和教育･研究セクター長）
通訳：田中雄三氏
（龍谷大学名誉教授）

シャライ館長講演会の様子

■アルセニエフ総合博物館

アルセニエフ博物館は、シベリア横断鉄道の終着駅ウラジオストクにある、ロシア極東地域において最も古い博物館であり、1884年に創設された。その後、「ウラジオストク国立州博物館」、「沿海地方郷土誌博物館」と改称され、1945年に探検家V.K. アルセニエフの名を冠した「アルセニエフ沿海地方郷土誌博物館」に、そして1985年に現在の名称となった。収蔵点数40万点を超える総合博物館である。

※ V.K. アルセニエフ（1872-1930）は、黒澤明監督の映画「デルス･ウザーラ」（1975年）の原作者でも知られるロシアの探検家です。アルセニエフ博物館訪問の様子は、『立命館大学国際平和ミュージアムだより』（Vol.18,No.2（2010.12）「館長だより」）で紹介しています。

調印式の様子

第18回日本平和博物館会議に参加して

2011年11月17日・18日、沖縄県のひめゆり平和祈念資料館にて第18回日本平和博物館会議が開催されました。初日の会議では、対馬丸事件の展示の有無を通して、「沖縄戦の開始時期」をめぐる各館の展示や歴史認識など、平和博物館のあり方に迫る内容が協議されました。

翌日の見学では、沖縄陸軍病院20号壕、南風原町立文化センター、糸数アブチラガマなど沖縄戦の歴史史跡や展示をめぐりました。

何よりも印象深かったのは、アブチラガマの見学でした。人が一人通る程度の小さく急な入り口を下りると、中は比較的広いですが、少し奥へ進むと光は届きません。1945年5月1日から、25日の撤退命令まで、この壕の中でひめゆり学徒隊として負傷兵の看護にあたった、ひめゆり平和祈念資料館の島袋淑子館長の案内で見学しました。日に日に衛生状態が悪くなる中、学徒2名だけで多くの負傷兵を看護した緊張感、壕の天井から常に滴り落ちる水滴が原因の発熱、空気孔のそばで休息したこと、熱などのため暴れる（脳症）患者の病室のことなどを、その場所の記憶の中から選りだして、限られた時間の中で私たちに語ってくださいました。多くの人を何度も案内し、証言をしてきた島袋館長の言葉に迷いは無く、説明は整然としていましたが、滑らかに語りながら涙が止まらない様子に心を打たれました。当時ひめゆり学徒には立ち入り禁止であった脳症患者の区域には、現在も立ち入ることができないといいます。私たちは、「証言に何を聞くのか？」という問いを改めて考える機会となりました。

壕の上で、アブチラガマの全貌を説明する島袋館長

壕から出た直後、見学者は緊張感に包まれましたが、その後の昼食会では、島袋館長のお勧めの素敵なレストランにご案内いただき、和やかな締めくくりとなりました。

壕の入り口

2010年度　資料・図書などの寄贈者一覧

2010年度は、以下の方々から資料や図書などをご寄贈いただきました。
お名前を記し、感謝の意を表します（敬称略・50音順）。

資料

朝日新聞社阪神支局
足立　恭子
井田　　洋
伊吹　和子
江畑　賀正
岡尾　惠市
岡田　宜紀
面手　勝仁
笠井　晶二
岸本菜穂美
北川　　登
木立　雅朗
日下部頼子
藏原　三雪
佐藤　益弘
髙橋三津子
田尻　　睦
田隅　本生
寺内　邦夫
西井美千代
西野　孝治
野村　頌子
長谷川澄夫
人見　潤介
福嶋　桂子
藤重　典子
藤谷　満恵
松下かつ子
三上　愛子
宮口　昌郎
森島　貴子
柳原　　功
柳樂　優里
立命館大学全学自治会
平和委員会代表 菊池朋之

図書

青木　信博
安住　るり
安斎　育郎
飯田　　勇
池田　錬二
伊藤　　昭
伊吹　和子
岡尾　惠市
岡崎　　薫
岡田　黎子
岡野　　正
奥山義三郎
おざわゆき
面手　勝仁
鯨井　邦彦
工藤恵美子
久保　権一
倉本　直治
小泉　靖子
白川　　淑
末永　洋一
高杉　巴彦
髙橋三津子
竹定　政一
田尻　　睦
塚田　　勲
柘植　良一
永井　瑞江
長瀬　充弘
西井美千代
野村　忠男
原　　圭治
廣瀬　耕作
広橋　澄子
藤岡　　惇
藤田　さほ
星野啓次郎
三上　愛子
David Moreton
柳樂　優里
山下　詔康
横山　周導
15年戦争研究会
吉田ちづゑ
世継　淳子
和田　修二

団体　172団体

※以上、掲載の許可をいただいた方々につきまして、お名前を掲載いたしました。

「立命館附属校平和教育実践展示」に関わって

国際平和ミュージアム運営委員
一貫教育部副部長 大竹昌幸

2011年度の第5回立命館附属校平和教育実践展示は、立命館中学校・高等学校を皮切りに、10月16日～12月25日まで各校2週間の期間で実施しました。

「平和と民主主義」を教学理念とする立命館では、「正義と倫理をもった地球市民として活躍できる人間の育成」を立命館憲章で掲げており、附属校においてもさまざまな取り組みが進められています。展示したものはその中の一部ではありますが、展示順に簡単に触れておきます。

立命館中学校・高等学校では、中学校2年生の沖縄平和学習と全校から募集したエッセイの優秀者を対象にしたカンボジア・タイ研修（昨年はベトナム・カンボジア研修）、及び高校での課題レポートを展示しました。

立命館宇治中学校・高等学校では、中学校2年生の平和に関するトピックのポスターと日中韓の青少年が交流するキャンプに参加した中学生の報告、及び高校3年生による東日本大震災の被災者の方への海外からのメッセージを展示しました。

（立命館小学校の展示の様子）

立命館小学校では、4年生の平和学習の成果をポスター展示することを中心に、小学校の平和教育への取り組みを紹介しました。

立命館守山中学校・高等学校では、近年の平和学の成果として、「平和でない状態」を中学校2年生の視点から考えポスター展示しました。

最後の立命館慶祥中学校・高等学校では、「北の立命館発～地球市民の想い～」と題して、中学校3年生の平和学習の様子をDVD上映するとともに、中学校平和学習から1年後の高校1年生の取り組みと広島・長崎での活動報告、及び高校2年生の海外研修旅行報告と美術科生徒の作品を展示しました。

（立命館慶祥中学校・高等学校の展示の様子）

また本年度は全附属校共通の取り組みとして、中学生には「平和について」、高校生には「平和な社会を作るために」というテーマ作文を展示しました。

このような活動を通して、平和について本学の児童・生徒たちが考えたこと・主張したいことを世の中へ発信することが可能となりました。期間中、多数の来館者の皆様にアンケートの記入をしていただき、貴重なご意見・ご感想を頂戴しました。児童・生徒たちが発信したメッセージに対して、このようなフィードバックをいただけることに感謝し、さらなる取り組みに活かしていければと考えています。

立命館大学国際平和ミュージアムは、大学立平和博物館として他の平和博物館と連携し、「日本平和博物館会議」や「平和のための博物館市民ネットワーク」等々を通じて、平和教育と研究に取り組むだけでなく、附属校の平和教育を支える拠点ともなっています。

特に本年度は、そのミュージアムが共催となって開催されたAPPRA（アジア太平洋平和研究学会）において、「附属校平和教育研究会」の成果を発表する機会をも得ました。

学会の事務局長をしておられる国際関係学部の君島東彦先生や附属校を指導していただいている秋林こずえ先生をはじめ、お世話になった関係の各先生方やミュージアムの事務の方々に改めてお礼申し上げます。

第３回 長崎原爆資料館

日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE
日本平和博物館会議（ロゴマーク）

施設の概要

長崎原爆資料館は、被爆の実相と長崎市民の平和への願いを広く発信するため、長崎市が運営している公立の資料館です。

長崎原爆資料館開館以前は、1955（昭和30）年に開館した博物館・音楽ホールを備える多目的文化施設である長崎国際文化会館の一部で原爆資料の展示を行い、1975（昭和50）年以降は全館において原爆資料を展示することとなりました。原爆被爆50周年記念事業の一つとして、1996（平成8）年4月に鉄筋コンクリート地下二階地上二階建て建築延べ面積7,949.73m^{2}の現施設に建て替えを行い、長崎原爆資料館として開館しました。

展示内容

常設展示は、4つの区画（A:「1945年8月9日」、B:「原爆による被害の実相」、C:「核兵器のない世界を目指して」、D:「ビデオルーム」）に分けて、それぞれのテーマごとに展示しています。

常設展示の中心は、B:「原爆による被害の実相」です。

この部分では、科学的な説明と現物資料を連携させながら、より具体的に原爆被爆の実相を学ぶことができます。

吹き抜け部分を活用し、火の見やぐらや給水タンクなど、大型被爆資料を展示することで原爆投下直後の長崎の街を再現しており、実際に被爆したものでなければ表現することができない圧倒的な破壊力を伝えています。

また、原爆被害の要因（熱線、爆風、放射線）ごとに、特徴的な被爆資料・被爆写真を展示しています。この部分には、原爆投下の翌日に撮影された写真を多く展示し、被爆直後の惨状を考えることができます。

企画展示室では、常設展示と相互補完し、より具体的に、より多面的に原爆被害の実相を見て、感じて、学んでいただくため、常設展示室で展示していない資料などを期間を定めて展示したり、毎年テーマに基づいた被災資料や記録資料、絵画などの企画展示を開催しています。

常設展示

今年度は、「永井隆のまなざし」展、原爆資料館収蔵資料展、8.10 ナガサキ展を開催しました。

展示以外の活動

長崎原爆資料館では、常設展示や企画展示など館内の展示のみならず、市内に点在している被爆した建物や植物の保存や、その説明板を設置しています。また、県外での原爆展の開催や資料の貸し出しなども行っています。

また、館を拠点として、平和推進の取り組みや平和学習の支援も行っています。

今後の展望

原爆資料館では現在、約7,000件・約19,000点の資料を収蔵しています。

収蔵資料の経年変化や保存が大きな課題となっています。映像フィルムは洗浄およびデジタル化を行い、活用を図っており、被爆から67年、開館から16年が経過する中で、紙資料や布製品など今後、保存処理が必要なものが増えていくことが想定されます。

一方、被爆者の平均年齢は76歳を超え、原爆資料館が果たしていく役割は、ますます大きくなってくると考えられます。

長崎市民をはじめ、多くの機関、博物館などにもご協力いただきながら、原爆被害の実相を伝え世界恒久平和を発信する原爆資料館として充実に努めていきたいと考えています。

長崎原爆資料館外観

基本情報

◆長崎原爆資料館
◆所在地：長崎市平野町7番8号
◆館長：中村明俊
◆入館料：大人・200円、小人（小・中・高）・100円
◆電話：095-844-1231
◆http://www1.city.nagasaki.nagasaki.jp/peace/japanese/abm/index.html

自分（たち）のできることへの挑戦を

立命館大学国際平和ミュージアム
ボランティアガイド・平和友の会　川畑康郎

1980年、学校の夏休みを利用して「平和のための戦争展」が、東京、大阪、京都で行われましたが、10年ほどたつと、京都では、夏休みだけではなく、いつでも見られる施設がほしいという運動がおこりました。

それに応える形で、国際平和ミュージアムが建立され、今年5月19日、20周年を迎えられます。おめでとうございます。この間、国内外の平和運動に寄与されてきた貢献は、筆舌に尽し難いものがあります。

ミュージアム創立の翌1993年、目から鱗のガイド養成講座の修了生が土台となって発足し、ミュージアムを拠点に自主的活動を続けている私ども「平和友の会」へのご厚情に対し、この場をかりて、あらためて、お礼申しあげます。ありがとうございます。

ミュージアムが来館者に渡すパンフレットの表紙には「みて・かんじて・かんがえて・その一歩をふみだそう」の文字が躍っています。「平和とは何か　自分（たち）に何ができるか」を問いかけています。

2010年12月、地下入口の壁面に、タテ約220cm（最下段が約70cm カット）ヨコ約260cm の巨大な段ボールが台紙のちぎり絵が飾られました。立命館宇治中学の1年生のクラスが全校によびかけて集めたペットボトルのラベルや商工会議所の協力を得て廃棄予定の黄金紙などを材料に、分担をきめ、1年かけて作った「風神雷神屏風絵」です。クラスの生徒の写真（生徒35人と担任）と共に安斎名誉館長の見事な挿絵もそえられています。巨大なるが故に、来館者の目をひきます。パンフの表紙の文言を指差しながら「『自分（たち）に何ができるか』の問いかけに応える一つの例。みなさんも、ぜひ、自分（たち）ができることを見つけてほしい」というと、納得して館内に消えます。

「私のできる平和運動は、これだ」とハングル語や英語でも憲法9条の毛糸の編み込みをされている山内豊さん（ニット作家　高松市在住）の憲法タペストリーの前の空間は「自分（たち）のできることへの挑戦」をよびかける格好の場所です。作者が男性ということもあって関心を示す人が多いのです。

よく利用している「ベトナム戦争・核兵器」の映像（約10分）も多くの来館者をとりこにします。

沖縄の基地から飛立ったアメリカ軍が使った数々の残虐な兵器の相つぐ映像を（時には目をそむけながらも）くいいるように見つめます。流れるコメントや補足するコメントに耳を傾けてくれます。「アメリカは負けたンだよ」というと、ビックリして「なンで？」ときいてきます。

「ベトナム戦争が終って今年は37年目。人間が作る兵器はさらにえげつなくなった」と核兵器のスイッチをいれます。最後の劣化ウラン弾の犠牲者の衝撃的な映像には顔をそむけ、声も出ません。映像が終って、声をかけます。

「地下は戦争の場面が圧倒的。平和とは戦争が無いのが何より。しかし戦争さえ無ければいいかといえば、そうではない。全体を通して、平和とは何か、自分（たち）に何ができるかを見つけるために今日ここに来ていると思う」とパンフの表紙の文言をなぞりながら「分った？」をきくと「分りました。ありがとうございました」と言って離れていきます。

「自分（たち）にできることを」とよびかける時、「参考までに」と紹介するのが、広島・大洲中学校の3年生有志が作った“ねがい”という歌です。

すてきな歌です。しかも、次の2つの広がりがあります。

1. 世界31か国　エスペラント語を含め37言語に訳されています（2010年現在）
2. 子どもたちの作ったのは「∫ もしもこの頭上に落されたものが／ミサイルではなく本やノートであつたなら／無知や偏見から解き放たれて／きみは闘うことをやめるだろう」の1番に始まって4番まで。「歌詞5番を作詞しよう」のよびかけ（2005年1月）に、世界中のこども・大人が応募し、2010年12月現在、2060番に達し、歌詞集は344頁、世界で一番長い歌になっています。まだまだ続きます。子どもたちの試みが世界中に広がっています。

「微力であっても無力ではない」証の一つです。これからも折にふれて「自分（たち）にできることを」と働きかけたいと思うのです。

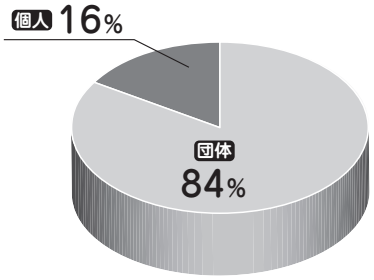
“ねがい”5番応募 HP
http://www.jearn.jp/2003conference/negai/kashi5.html
“ねがい”歌詞掲載 HP
http://www2.jearn.jp/fs/1023/negai/index.html

2011年4月～2012年1月 入館者状況

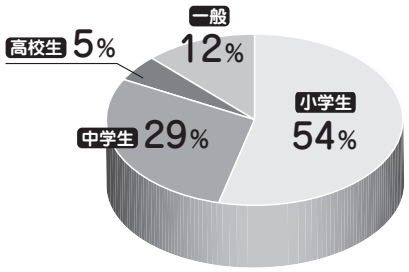
◎開館日数　241日

◎オープン後常設展入館者数累計　791,515名

＜有料団体・個人入館者状況＞



＜有料団体入館者数状況＞



2011年度 月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	人数計（名）
総入館者数	2,725	4,604	4,915	2,509	2,971	2,990	9,531	8,350	2,973	868	42,436

特別展	春季特別展 『世界187の顔ー生命（いのち）の現場からー』	（5/17～7/10）	7,909
	特別展 『世界報道写真展2011 ―WORLD PRESS PHOTO 2011―』		
	京　都（立命館大学衣笠キャンパス）	（9/21～10/16）	7,065
	滋　賀（立命館大学びわこ・くさつキャンパス）	（10/18～11/3）	2,669
	大　分（立命館アジア太平洋大学）	（11/6～11/20）	2,723
	秋季特別展 『プリーモ・レーヴィ ―アウシュヴィッツを考えぬいた作家ー』	（10/22～12/17）	12,715
	小　計		33,081
特別展示	写真展「東日本大震災の現場から」第1弾（国際平和ミュージアム　1階ロビー）	（5/17～6/19）	オープン
	写真展「東日本大震災の現場から」第2弾（国際平和ミュージアム　1階ロビー）	（6/21～7/30）	オープン
	特別展示「ベルタ・フォン・ズットナー展」	（8/10～8/28）	オープン
	第58回不戦のつどい協賛企画　わだつみ平和文庫資料寄託記念「わだつみ　不戦の誓い」展	（12/9～12/17）	オープン
講演会ほか	日独交流150周年・DAAD 友の会創立25周年記念 ーDAAD アルムニ会学術シンポジウム・平和コンサート（創思館カンファレンスルーム、中野記念ホール）	（4/16）	134
	第5回国際平和・人権連続セミナー（びわこ・くさつキャンパス　R-103教室） アレクサンダー・オルブリッヒ氏（大阪・神戸ドイツ連邦共和国領事館総領事）『国際平和構築と科学兵器禁止条約』	（5/10）	52
	「世界187の顔」公開記念講演会（衣笠キャンパス　明学館94号教室） 山本宗補氏（JVJA 会員、「fotgazet」創刊号編集長）『世界187の顔から見えてきたもの』	（5/24）	218
	DVD 上映＆レクチャー「カティンの森」（国際平和ミュージアム　2階会議室） ラドスワフ・ティシュキェヴィッチ氏（駐日ポーランド共和国大使館一等書記官）	（6/29）	38
	特別講演「福島原発から何を学ぶか？ー二度の現地調査をふまえて」（衣笠キャンパス　明学館96号教室）	（6/29）	203
	NGO ワークショップ「国際交流と平和ー世界とつながる　世界とつなげるー」（国際平和ミュージアム　2階会議室） 中沢聖史氏（国際交流 NGO・ピースボート、国際部通訳コーディネーター）	（7/16）	14
	第6回国際平和・人権連続セミナー（衣笠キャンパス　明学館96号教室） 大田昌秀氏（元沖縄県知事、前参議院議員、大田平和総合研究所主宰）『沖縄戦と在沖米軍基地問題を考える』	（7/20）	182
	夏休み親子企画「へいわ」ってなに？？ 2011（国際平和ミュージアム　2階会議室）	（7/22、7/31）	38
	下見見学会	（5日間・7/27、8/18、8/19、8/23、8/24）	76
	特別展示「ベルタ・フォン・ズットナー展」公開記念講演会（国際平和ミュージアム　2階会議室） ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士（INMP 統括コーディネーター、ブラッドフォード大学客員教授） 『ウィーンにおけるベルタ・フォン・ズットナー平和博物館創設に向けて』	（8/20）	50
	ワークショップ「ミリタリーをどうするかーガルトゥング博士とともに考えるー」（中野記念ホール） ヨハン・ガルトゥング博士（平和学者）	（9/16）	128
	「世界報道写真展2011」公開記念講演会		
	【京都会場】豊田直巳氏（フォトジャーナリスト）『3・11を記録し、記憶するために』（衣笠キャンパス 存心館801号教室）	（10/4）	171
	【滋賀会場】國森康弘氏（フォトジャーナリスト）『3・11被災地、紛争地から看取りまで～命のバトンを受け継ぐために』（びわこ・くさつキャンパス　エポック立命21ロビー）	（10/18、11/3）	137
	アジア太平洋平和研究学会2011年研究大会（APPRA）（国際平和ミュージアム、創思館カンファレンスルーム）	（10/14～10/16）	881
	NGO ワークショップ「環境保全 NGO シリーズー持続可能な未来を作ろう！ー」（国際平和ミュージアム　2階会議室）		
	第1弾　NGO 気候ネットワーク　豊田陽介氏（気候ネットワーク主任研究員）	（10/21）	12
	第2弾　NGO 日本ナショナル・トラスト協会　中安直子氏（ナショナル・トラスト推進部長）	（10/23）	14
	「プリーモ・レーヴィ」公開記念講演会（国際平和ミュージアム 1階ロビー）コーディネーター：加國尚志副館長（立命館大学文学部教授）		
	第1弾　竹山博英教授（立命館大学文学部）『プリーモ・レーヴィーアウシュヴィッツを考えぬくことー』	（11/5）	105
	第2弾　徐京植教授（東京経済大学現代法学部）『断絶の証言者プリーモ・レーヴィ』	（11/12）	138
	第3弾　鵜飼　哲教授（一橋大学大学院言語社会研究科）『”人間であることの恥”ふたたびー2011年の経験からー』	（11/19）	80
	長崎青少年ピースボランティア交流事業（国際平和ミュージアム　2階会議室、常設展示室） プログラム：ミュージアム見学、平和講義、活動交流会	（12/10、12/11）	23
	第7回国際平和・人権連続セミナー（国際平和ミュージアム　2階会議室） ヴィクトル・アレクセーヴィッチ・シャライ氏（沿海州国立アルセニエフ博物館館長　ロシア） 『世界平和と諸民族の友好をめざす沿海州国立アルセニエフ博物館の活動について』―沿海州地方での日本人捕虜の生活に関して―	（1/13）	60
	小計		2,790

編集後記

2012年、立命館大学国際平和ミュージアムは開設20周年を迎えます。1992年の開設以来、世界は決して平和とは呼べない状況にあります。冷戦体制崩壊後の世界は、湾岸戦争、ボスニア紛争、ニューヨーク同時多発テロ、アフガニスタン戦争、イラク戦争、ガザ爆撃、など、ほとんど永続的とも思える戦争状態にあった時代でした。紛争を解決し、安全と人権を保障するシステムの構築は、まだまだ人類の永遠の課題でありつづけています。

ミュージアムの周年行事として20年間の活動を振り返るとき、そこに実に多くの方々の努力が注がれていたことに気づきます。そしてそこには立命館大学の教職員のみならず、市民の方々の平和への思いが熱く息づいていたのだと思います。20年という一区切りを経て、次の時代を見据える時に、ミュージアムが果たすべき役割は重要性を増すばかりです。今後も多くの方々のご協力とご支援をお願いする次第です。

20周年の特別企画展として「放射能と人類の未来」を安斎名誉館長監修のもとで展示する予定です。福島の原発事故の後、漏出した放射性物質による汚染や被害の問題は、福島の現状の問題とともに、次世代に積み残されるたいへんな負債であると言えます。私たちは、この危機にどのように立ち向かうべきなのでしょうか。教育や研究の立場から、何ができるのか。この問いとともに、未来の平和を構想することを始めたいと思います。それはまた、大きく揺れ動く世界の中で、国際平和ミュージアムの来るべき10年の課題に応える試みでもあります。

加國尚志

※　本誌に掲載されている情報・写真等の無断転載はおやめください

ミュージアムインフォメーション

特別展

●開設20周年記念　春季特別展「放射能と人類の未来」

会　　期：2012年5月15日（火）～7月27日（金）
主　　催：立命館大学国際平和ミュージアム
後　　援：京都府、京都市、京都府教育委員会（予定）、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会
　　NHK京都放送局、KBS京都、朝日新聞社、京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社
監　　修：安斎育郎（国際平和ミュージアム名誉館長）

助成 独立行政法人 日本万国博覧会記念機構
Supported by the Commemorative Organization for the Japan World Exposition('70).
この助成金は、日本万国博覧会の収益を基にしています。

2011年3月11日の東日本大震災は、津波による未曾有の被害をもたらしたのみではなく、福島第一原発の事故により、大量の放射性物質が拡散し、健康や環境への影響について大きな不安を与えています。今回の原発事故の事実を正確に理解し、拡散した放射性物質についての正しい知識を持つとともに、原子力の利用や原子力発電所をめぐる政策から戦後の日本のあり方をパネルや映像などでわかりやすく展示し、今後の日本を生きていく上で必要な「放射能リテラシー」について、一人ひとりがより深く考えていただくことを願い開催します。

関連企画　**公開記念講演会**

6月10日（日）　13：30～15：30
会場：立命館大学 衣笠キャンパス　創思館カンファレンスルーム
演題：「放射能リテラシーのすすめ」
講師：安斎育郎（国際平和ミュージアム名誉館長・立命館大学名誉教授
　　安斎科学・平和事務所所長）

展示内容も踏まえて、本展監修者である安斎名誉館長による「放射能リテラシー」についての講演会を開催いたします。

放射能による土壌汚染を調べるため、防護服に身を包み、100円ショップで購入したスコップでトレイに土を採取する安斎育郎名誉館長

●「世界報道写真展2012」
－WORLD PRESS PHOTO 2012－

京都会場　会　　期：9月19日（水）～10月14日（日）（立命館大学国際平和ミュージアム）
滋賀会場　会　　期：10月16日（火）～11月1日（木）（立命館大学びわこ・くさつキャンパス）
大分会場　会　　期：11月4日（日）～11月18日（日）（立命館アジア太平洋大学）

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している世界報道写真コンテスト入賞作品（約200点）で構成した写真展で、今年で55回目を迎えます。

いま、この地球上で起こっている世界の様々な側面を、写真を通し来場者の方に知っていただくことで、社会のあり方とは、平和とは何かについて、思いをめぐらせていただく機会となるべく開催するものです。

今年度も世界100カ所を巡回、展示に足を運ぶ人は全世界で数百万人になると予想されています。

〔世界報道写真大賞〕
サムエル・アランダ（スペイン／2011）
イエメンのサレハ大統領に対する抗議デモの間に負傷した親類を抱きかかえる女性

詳細はホームページでお知らせいたします。

ミュージアムインフォメーション

ミニ企画展

●「平和のメッセンジャー　ある軍国少年の歩んだ道」 ≪開催予定≫

会　　期：2012年3月28日（水）～ 4月15日（日）
主　　催：平和のメッセンジャー古賀哲夫展実行委員会

スリランカからの応援メッセージ
（「スリランカからの贈り物
～平和の祈りの木を咲かせよう～」）

学生企画

●開設20周年特別企画
「わたしたちにできること～震災1年を振り返って」

主　　催：立命館大学国際平和ミュージアム
≪展示内容≫
本展は、東日本大震災の発生を受けて、それぞれの立場から活動した立命館大学生の取り組みを紹介する連続企画です。震災復興の現場で見たこと、感じた課題、そして生活や地域社会の再建に向けて、学生たちが紡ぎ出す希望や関係性の構築を、学生自身の手で表現した展示です。ぜひご覧ください。

≪企画名称≫	≪会　期≫ 2012年
■スリランカからの贈り物～平和の祈りの木を咲かせよう～	4月20日（金）～ 5月20日（日）
■震災から1年。気仙沼から同世代へ	5月26日（土）～ 6月17日（日）
■被災者×ボランティア?いいえ、 宮城のおっちゃんおばちゃんこども×京都の学生	6月23日（土）～ 7月15日（日）

夏休み親子企画「へいわ」ってなに?? 2012

2012年7月26日（木）
今年で7度目となる企画。平和について、戦争について、世界で今起きていることについて、わかりやすく学び、平和について親子で考えていただく機会となりますよう、開催いたします。

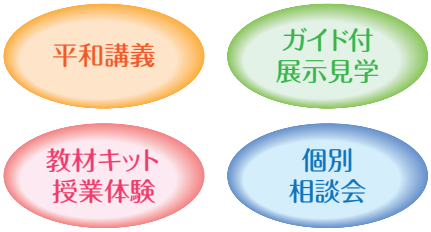
※2012年度春期特別展関連のプログラムを予定しています。

2011年夏休み親子特別企画の様子

教員下見見学会

2012年7月25日（水）、27日（金）、8月21日（火）～ 24日（金）
夏休みに小学校・中学校の先生方を対象とした下見見学会（無料）を開催いたします。京都への修学旅行、遠足、郊外学習、地域探検等様々な目的に合わせたミュージアムへの団体見学が可能です。4月貸出開始の教材キットを使った模擬授業もあります。

〈下見見学会プログラム〉



「平和って なに色?」一字で表す平和のメッセージ

会　　期：2012年10月27日（土）～ 11月3日（土・祝）
2005年文字・活字文化振興会の施行により、10月27日は「文字・活字文化の日」と制定されました。文字・活字文化についての関心と理解を深めていただくため、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所と連携して、文字・活字と、平和を楽しく学べる企画を行います。

「映画上映会」

2003年から恒例となったこの企画は、「平和」をテーマとした映画上映と国際平和ミュージアムの館長等が映画の制作に関わった監督や関係者から、その思いを直接聴く機会を作るという対談を組み合わせたものです。前期・後期各1回の上映を予定しています。

● 詳細はホームページでお知らせいたします。

第19巻第3号（通巻55号）　2012年3月9日発行

立命館大学
国際平和ミュージアムだより
編集・発行
立命館大学
国際平和ミュージアム
〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1
TEL. 075-465-8151　FAX. 075-465-7899
http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html